目次

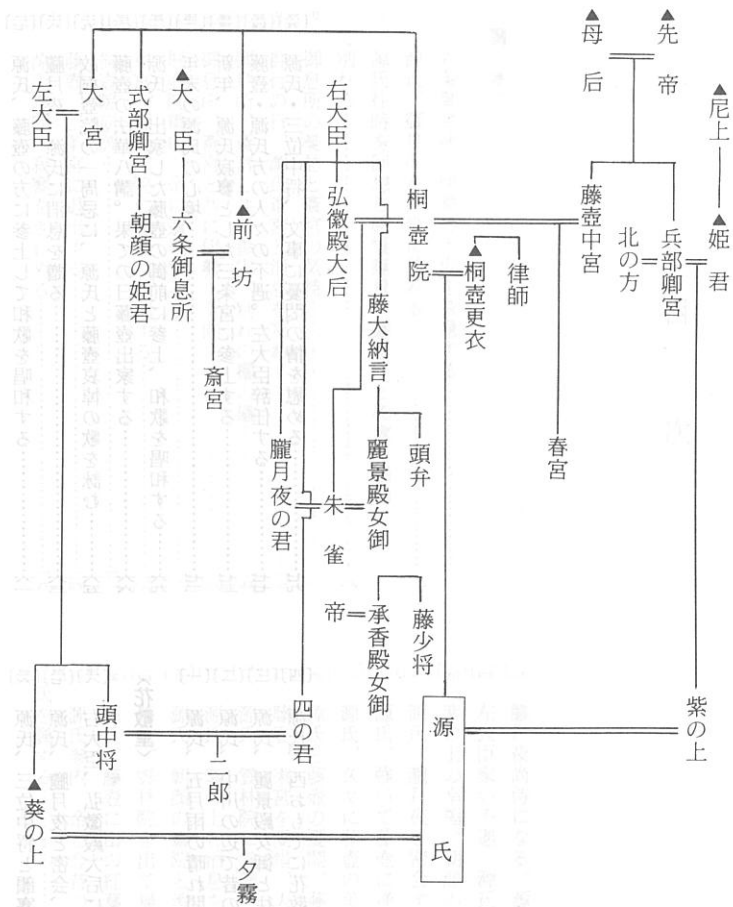
〈賢木〉

〔一〕六条御息所、伊勢の下向を決意する……一
〔二〕源氏、御息所を野宮に訪れる……二
〔三〕源氏往時を回想し感慨無量、御息所と和歌を唱和して別れる……八
〔四〕御息所の憂愁と斎宮の気持……一一
〔五〕群行の日、源氏斎宮と消息を交わす……一三
〔六〕御息所、斎宮と共に参内、別れの櫛の儀……一五
〔七〕御息所、斎宮と共に伊勢へ下向する……一六
〔八〕桐壺院重病、帝に遺戒する……一八
〔九〕東宮と源氏、院に参上し訣別する……二〇
〔一〇〕桐壺院崩御……二一
〔一一〕藤壺、三条宮に退出する……二四
〔一二〕源氏の邸、寂寥をきわめる……二五
〔一三〕朧月夜尚侍になる。源氏と心を通わす……二六
〔一四〕左大臣家の不遇、源氏以前と変わらずに訪れる……二八
〔一五〕紫の上の幸福。朝顔の姫君斎院となる……二九
〔一六〕源氏、朧月夜と密会する……三一
〔一七〕源氏、強いて藤壺に逢う。藤壺の悩み……三四
〔一八〕源氏、久々に藤壺の美しい姿を見て自制心を失う……三六
〔一九〕源氏と藤壺の憂愁、藤壺出家を決意して参内する……四三
〔二〇〕藤壺、東宮を愛惜、人知れず訣別する……四五
〔二一〕源氏、雲林院に参籠する……四七
〔二二〕源氏、紫の上と消息を交わす……四九
〔二三〕源氏、朝顔の斎院と消息を交わす……五一
〔二四〕源氏、雲林院を出て帰邸。紫の上女らしく成長する……五三
〔二五〕源氏、藤壺に山の紅葉を贈る……五五
〔二六〕源氏参内、帝と今昔の物語をする。退出時、頭弁源氏を諷する……五七
〔二七〕源氏、藤壺の方に参上して和歌を唱和する……六一
〔二八〕朧月夜、源氏に消息を贈る……六三
〔二九〕故桐壺院の一周忌に、源氏と藤壺哀悼の歌を詠む……六五
〔三〇〕藤壺の法華八講。果ての日藤壺出家する……六六
〔三一〕源氏、出家した藤壺の御前に参上、和歌を唱和する……六九
〔三二〕年末の源氏の心境……七三
〔三三〕新年、源氏寂寥とした三条宮に参上する……七三
〔三四〕藤壺・源氏方の人々の不遇。左大臣辞任する……七七
〔三五〕源氏・三位中将、文事に憂悶の情を慰める……七九
〔三六〕源氏、三位中将と韻塞、三位中将負態をする……八一
〔三七〕源氏、朧月夜と密会、右大臣に発見される……八五
〔三八〕右大臣、弘徽殿大后に報告。源氏の放逐を画策する……九〇

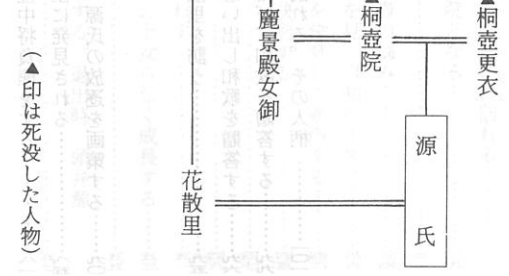
〈花散里〉

〔一〕源氏、五月雨の晴れ間に花散里を訪う……九五
〔二〕源氏、中川の辺で昔の女を思い出し和歌を贈答する……九六
〔三〕源氏、麗景殿女御と往時を偲び、和歌を贈答する……九九
〔四〕源氏、西おもてに花散里を訪れる。その人柄……一〇一

〔「賢木」の巻系図〕



〔「花散里」の巻系図〕



（▲印は死没した人物）

賢木

〔一〕

斎宮の御下り近うなりゆくままに、御息所もの心細く思ほす。やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひて後、さりともと、世人も聞こえあつかひ、宮の内にも心ときめきせしを、その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことに憂しと思すことこそありけめと知りはてたまひぬれば、よろづのあはれを思し棄てて、ひたみちに出で立ちたまふ。

一　巻名は、野宮（ののみや）で六条御息所と源氏が交わした歌「神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ」「少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ」（七〜八ページ）による。この巻は、源氏二十三歳の秋から二十五歳の夏までのこと。

二　六条御息所の娘。「葵」の巻で伊勢の斎宮になった。斎宮は伊勢神宮に奉仕する未婚の皇女・女王。帝の御代がわりの時に卜定（ぼくじょう）される。

三　伊勢への下向。

四　六条御息所。

五　源氏の正妻葵の上。「葵」の巻で夕霧を出生して亡くなった。

六　正妻が亡くなったので、今まではともかく、今度こそは御息所が正妻の扱いを受けるだろう、と期待したのである。

七　野宮の内部でも。野宮に仕える人々をいう。

八　源氏は葵の上に祟った怨霊が御息所であったことを知って、嫌悪感を抱いた。

九　源氏への断ちがたい恋情や執着。